

片倉 武雄氏

片倉製糸紡績株式會社專務取締役

從來我國の生絲の輸出を以て世界市場に知られて居る。其製絲工業の覇者として生絲輸出貿易の四割五分を一手に占めその一擧一笑は帝國の財界を動かすに足ると稱されているは片倉製絲紡績會社である。此の社の大屋臺を背負つて居る英才に現專務取締役片倉武雄氏がある氏は明治十一年片倉光治氏の長男として呱呱の聲をあげた。氏は幼少より才氣煥發大いに前途を囑望されつゝ成人した人である。學卒へるや直ちに片倉組に迎へられたが同族なるが故に、敢て特別の地位を與へらるゝ等の事なく、普通社員として實務に携はり眞に力量と才能をもつて昇進を重ね、遂に專務取締役として同社經營の樞機に參劔するに至つたのである。この間氏の努力は文字通りに獻身の二語に盡きて居る。氏は天稟の才腦を傾注して各般の經營に不斷の革新を怠らず、他方操業その他の技術的設備に關しては總ゆる調査研究の下に斯界の先驅となり、或は従業員に對しては同業者間の模範と稱されて居る。其寄宿舎の如き、食料の如き絶えず深甚なる注意を拂ひ労働者優遇を先決問題として鋭意能率増進を圖る等大いに業績を振興せしめ、遂に今日の如き盛大なる發展をなさしめた

るものである。斯くて、大正九年三月組織を改めて株式會社となし、逐次機會ある毎に大小工場を合併合同して今や所有工場、内地に於て三十九ヶ所朝鮮三ヶ所を有し、總釜數約二萬臺、年産額約二萬圓と云ふ盛況を呈して居る。就中片倉製絲の世に誇るものは、その制度の完成せる點である。各養蠶組合を指導獎勵して之れが發達を督勵すると共に養蠶資金を融通して事業の圓滑を計り、桑園改植肥料購入等には會社自らも之れを斡旋して宜しきに就かしめ養蠶技術の講習、推薦製絲の講習、高等養蠶講習會の開催等、技術の講習を怠らざるのみならず、階級を付して漸次向上せしめ、殊に従業員に對しては優遇法を講ずると共に、徹底的圓滿を計る爲めに従業員に對しても利益の分配法を設け同時に扶助法を制定して、疾病負傷死亡等による家族の安定を企圖する等、大會社の施設として毫も缺くる處なく、實に東洋第一たるの實力を備へて斯界第一の稱を悉にしてゐるのも宜べなる哉である。氏は斯くの如き大會社の常務取締役として君臨するの外、各方面に活躍して居ることは、十指に餘る會社の重役を兼ねつゝ寧日なき奮闘を續ける傍ら、育英事業にも常に力を注いで居り大正十二年には如上の功勞により「紺綬褒章」を下賜せらるゝの光榮に浴した。之れ全く氏が徳望と人格の然らしむる處であり、錦上華を添えたるものと言ひ得るものである。今後氏が活躍と共に一層發展するものである。

棚橋 寅五郎氏

日本製煉株式會社社長

日清日露の戦役後一躍東洋に於ける一大強國として列國に知らるゝと共に、歐洲の文化も我國へ流れ來り、それにつれて各種工業の勃興を見るに至つた。が指導者は外人技術者の手に依らざれば如何とも出来なかつたものであるが、其後年を経るに従つて此指導國を凌駕して、却つて我國より指導者を派遣すると云ふ發展振りは諸外國の驚嘆する處であることは周知の事實であるは今更謂ふまでもないことである。我日本製煉株式會社も其内の一つであつて、創立は相當古く明治二十六年であるから、今より四十七年前に初まつてゐる。元來當社の前身は前記の年の九月に棚橋製煉工場と云ふものが創立されて棚橋氏の個人經營であつて、製煉業を營んで居つたが、其後時勢の進展と業務の發展とに依つて、大正四年九月に組織を變更して、資本金五十萬圓の株式會社となし、日本製煉株式會社と稱するに至つた。是は今より二十五年前にして恰度歐洲大戰勃發して大いに業績を高め、當社は益々好轉を示し逐次發達を遂げるに至つた。即ち同六年七月には倍額の百萬圓に増資して事業の擴張を計つた。其後同九年五月には株式會社有機化學工場を合併して、再び資本金を倍額

の二百萬圓に増大し、更に現在一千萬圓と云ふ尅大なる資本を有するの盛況を示すやうになつた、大戰終息後の一般財界不振のため一時業績衰へたが、昭和七年より向上を呈して來た、最近にては俄然其需要の激増を見るに至り、當社全能力を擧げて増産に努力してゐると云ふ盛況を現出し、大に當社の伸展振りを發揮し、現在一割の配當を持続すると云ふ同業會社中の雄として知られてゐる。現に角四十有餘年間に於ける氏の奮闘振りは到底餘人には出来ない處である。氏は新潟縣人棚橋右久太氏の二男であつて、慶應二年四月生れである。同二十六年に東京帝國大學工科を卒業後歐米を歴遊して歸朝後工學博士の學位を授與され、其後製煉界に身を投じて精進してゐる。氏は實に學者には珍らしい實業家であつて、前記の如く獨力を以て工場を建設して製造に従事し、幾多の辛酸を経て今日の盛大を觀るまでの苦心と努力とは實に敬服するものがある。故に氏は人に對する思ひやり深く逆境にある者に對しては、己の及ぶ限りの力を以て助けると云ふ氣質で社員一同よりの尊敬と信望とは偉大なるものであつて、多年氏が業界に盡したる功績も甚大にして斯界に於て其徳望と信望とは絶大なるものであることは言を俟たぬ。今や我國は非常時局に際開して居るが故に、當社事業の益々盛大に赴く事は云ふまでもなく、自然業績の向上發展をなすは明かなるものであり、一層氏の奮闘を希望して止まない。

小池厚之助氏

小池證券株式會社々長

本邦財界の一角を衝き巍然たる偉丈夫の勇姿を現はしたのが我小池厚之助氏である。氏の嚴父は財界稀に見る發奮立志傳中の傑物として普ねく令名を馳せた故小池國三氏であることは餘りにも有名である。當社は實にこの國三氏によつて設立を見たもので、同氏の汗と油の結晶とも云ふべく、財界の白眉を以て謳はれる小池王國の代表事業となつゝある。大正十四年三月國三氏の訃に會ひ、氏が父業の一切を繼承するや、依然小池王國の本陣を當社に据へ、社業の發展に全力を擧げて傾注するといふ亡父への孝心ぶりを發揮した。氏は大正十二年東京帝大政治科を卒業するや直ちに歐洲へ鹿島立ち、英國へ渡つて全世界に名高きオックスフォード大學に入り、進んで經濟學の修得に志し、孜々たる螢雪の功成つて漸やく財政學の新智識を極めたが、丁度嚴父國三氏の逝去悲報に接し急遽歸朝の途につき、廿七歳にして小池王國の總帥として家督を相続するに至つた。當家現在の隆々たる勢力は、先代國三氏一代に於ける苦難の成果であつて、よく人のなし能はざる偉業といふべく、忍從邁進の受難を突破した處に豪らさがあり、又後世の青少年たるものゝ規範として好固の教訓と云

はねばならぬ。氏は生れながらにして、嚴父が丹精籠めて作りあげた山海の珍珠を居ながらにして箸をつけるべき立場にあつたが、凡人ならざる氏は實に能く此の嚴父國三氏の刻苦勲勵、心血を注いだ過去の賜物であることを忘れず、富裕の御曹子の身でありながら、決して奢らぬ。氏は一度父業を繼承、自分でその經營を開始するや、英國時代の新智識による嶄新なる經營法を採用し、社内的一大刷新を斷行し、亡夫の面目を躍如として保ち、更に躍進の途を切り拓いて行つた。此の父にして此の子ありの格背に背かず、氏の獅子奮迅の財界突入りは出色第二世の偉名を以て評され、誠に頭腦明快奇策縱横の才腕に富む新進氣鋭の花形實業家たるの眞價を發揮したと云へよう。又部下に對する慈愛心は上下一致の美風を生み、全く以て家族的な團欒を形作り、氏の命令一々何ものをもいとはずと云つた團結心を持ち、社運の隆盛は期せずして拓け、小池王國萬代の祝盃を擧げるに至つた。氏の財界進出は潑刺たる新進の鮮明なる一線を劃し、斯界日本の洋々たる前途に若さと熱と力を植へつけて、青年日本の心意氣を示したのである又氏は健康は萬能の基礎であると常に社員に健康法に就て注意してゐるが、自分自身に於てもテニス、ゴルフ、登山、水泳何んでも御座れの萬能選手ぶりを見せて、多忙の餘暇をつとめて心身の鍛錬に心懸け、財界飛躍の原動力の涵養に用意おさく／＼怠りがない。

河村 曉氏

東京鋼材株式會社取締役

東京鋼材は大正五年四月、東京スプリング製作と東京鋼材製作とを合併して、資本金百萬圓の株式組織にしたものである。東京スプリング製作と東京鋼材製作とは共に東清氏の個人企業であつて、もとは東同族の經營會社であつた。それが大戦後に於ける經營困難で、大正十四年十二月に資本金二百萬圓を四十萬圓に減資したが、先年上期に再び之れを百萬圓に増資し、更に同下期に二百萬圓を増資した。現在二百萬圓全額拂込済みである。當社の取締役河村曉氏は、岡山縣士族河村恕一氏の二男で、明治十一年一月を以て生れ、大正十一年家督を繼ぐ、明治三十五年度の東京帝國大學工科大学探礦冶金科出身にして、大正十四年同大學に論文を提出して、工學博士の學位を受く、學窓を出づるや、直ちに三菱合資會社礦山部に入り、爾來職務に勉勵するの餘暇専門學の研究に没頭す、初め同社尾去澤礦山技師となり、同副長に擧げられ大正二年本社に歸り製鐵事業の調査に當る同四年臨時製鐵所建設部の設置と共に其建設課長となり、兼二浦製鐵所の設計並に工事の監督に従事し工事竣成後同所統帥部長に任ぜられ八年三菱製鐵會社本社詰に轉ず、現時同社取締役にして東京

鋼材會社の取締役をも兼任す、又大正十三年四月より十五年三月迄日本鐵鋼協會々長を勤め現に其理事たり、金屬鑛業製鐵事業化學工業等の調査研究のため歐米に出張すること前後五回に及ぶ。嘗て東京帝國大學工學部講師たりしこともあり民間に於ける斯學界の權威者と尊敬されて居る。當社は大戰以來、かつてない好成绩で資本金を増加した結果、前期に比べると利益率は低下したが、一割配當は極めて餘裕綽々の配當である。製品は壓延鋼材、鍛鋼品、磨鋼、發條、窓枠及扉の五つに分れるが、軍需品に關係あるものが比較的が多い。従つて當社の業績好轉も、畢竟軍需インフレの結果に外ならないと謂へる。軍需工業の繼續する限りは、引續いて好成绩を擧げてゆける筈である。東京、大阪、福島、廣田の三ヶ所に工場を置き東京工場は鋼材、發條、廣田工場は鋼塊大阪工場で發條を製造してゐる。然して當社製品中に於ては發條と磨鋼とが顯著な増加を示してゐる。之等の需要は更に増加する筋道にあるので、それにつれて成績もなほ一段の好轉が見込める。尙當社の製品は、平和事業とも深い關係があり、特殊鋼、發條などは自動車、飛行機等の發達につれて益々需要も増加し、將來に伸びる可能性を充分に持つて居る。邦家多事多端の折柄、特に氏の健在を祈つて已まざる次第である。就中現在飛行機自動車其他軍需品需要特に多くなり、従つて當社の業績は彌が上にも進展して行く。

野澤 一郎氏

株式會社巴組鐵工所社長

氏は栃木縣人野澤龜吉氏の長男であつて、明治二十一年五月十六日を以て東京市に於て生れた、長ずるに及んで學序を経て東京工業大學の前身たる東京高等工業學校に入學し、明治四十三年同校機械科を卒業した、以來身を工業界に投じ其後石川島造船所に勤務したこともあつた其後氏は獨立にて巴組鐵工所を創立したのは大正五年の春であつた、營業所を芝區琴平町に置き工場を現在の京橋區月島に設けてポイラー製造に従事したるが、大正十二年關東大震災直後の建築界の趨勢に鑑みる所ありて、ポイラー製造を廢して、専ら鐵柱及鐵塔の製作に従事する様になつた、同年松澤平造氏を加へて家族と共に合資會社となして經營したるが、同十五年松澤氏物故せられたることにより其出資額二萬圓を受け継ぎ全く氏が獨占的事業となつた譯である。元來三井物産株式會社後援の下に經營し來りたるを以て、總べての注文は殆んど同會社を経て引受けて居り、從つて金融状態は潤澤である。性來氏は頭腦明晰であつて、財界の機を見る事又敏であるから、前記の如く震災直後に於て直ちに方向を轉じ、其の需要の將來多くなり行く鐵塔及鐵柱に志ろさす等中々の敏腕家である。氏は

幼にして聰明長ずるに及んで、其緻密なる頭腦と構造の才により高等工業機械科に入りしものと思われる。然し大正五年氏が初めて芝に營業所を置き月島に工場を設けて經營の衝に當りし當時の努力は實に偉大なるものであつた、それは全く奮闘努力日尙ほ足らじと云ふ字句の通りであつて、寢食を忘れて他を省るの邊なき程であつた其後漸く認めらるゝ様になつてから、彼の大震災に遭遇して挫折せんとしたが、氏は奮起心を以て之れに當り、合資會社組織に改めて活躍をつゞけ大いに好果を納める様になつた處、共同出資者たる松澤氏の死に遭ひしも其時は出資額を自己に引受けて、今日迄營業を續けて來てゐる。之れ全く氏の手腕と努力の賜ものであることは申すまでもないが、一面には三井物産會社と云ふ後援があるから、一層心強いものがあつた譯である。然し同氏が氏の後楯となつて呉れる迄の基礎を鞏固にした、氏は斯界に於ける正に偉材でなくてはなんであらう。氏は其性穩健にしてよく人を導き會社に在りても従業員達をいたはり且指導して其製品の好しき物を作製すると共に業績の向上發展に努力ををしまぬと云ふ熱心家である。故に當社の従業員は一致協力して社業の進展に努力して一意専心熱と意氣とを以て努力すると云ふ斯界には珍らしき有様を示現してゐる。氏は讀書を樂しみとする最近鐵工業は軍需關係の製品が激増して益々好況を呈して居る。

辻本 豊三郎氏

福助足袋株式會社社長

當社の前身は辻本福松商店といひ、明治十六年一月に堺市大町東二丁に小賣店を出したのに始る。明治廿二年の頃堺足袋の基礎を固める爲めに店主は卒先して同業組合を組織し「堺足袋」の名を以て販路を擴め以外の進歩をなしたが、其後大量生産に着眼し、「手縫に優る機械縫の足袋」を標語に益々販路を擴め、大正四年合名會社に組織を變更した。更に大正八年十月百五十萬圓全額拂込済の株式組織に改め、安井町に現在の工場建設に着手した。越えて九年三月百萬圓を増資して二百五十萬圓とし、十四年七月更に二百五十萬圓を増資して五百萬圓とす。而して工場政策に一大機軸を出すべく、第一に能率の増進に着眼して機械器具の改善、配置工場の採光通風煖房等の施設を行ひ、第二の販路の擴張方法の一として同業者を卒先して新聞廣告を始め、これまた大量生産の上にも多大の効果を収め、其他諸種の屋外廣告等により福助足袋の名は全國に擴まるに至つた。大正十四年には能率増進並に優良品期成工場の認定を受け、科學的管理法を徹底的に遂行した。現在六支店、二出張所、五十有餘の販賣所を擁するに至り、足袋製造界に覇を唱へるに至つた。現社長辻本氏は先

代福松氏の分家にして一家を創立した努力家である。本家辻本家は堺市土着の舊家に於て木綿類の小賣をなし明治十六年足袋製造を創め、同三十七八年頃商標を福助と稱し、積極的擴張の下に今日の基礎をなした。氏は大阪府人北川源之助氏の長男で、明治十四年一月を以て生れ、先々代福松氏の養子となり大正九年養弟福松氏の後を享けて家督を相續した。幼より養父經營の足袋工場に勤務し養父を助けて其發展を劃し後福助足袋會社、福助商會社を興し營業を之に繼承し現在其社長である。又堺商工會議所會頭に推され嘗て衆議院議員に當選したが一回のみで以後は福助足袋に専念してゐる。當社は昭和三年上期に配當を二割から一割に下げ、更に七年四月決算年一回に改むから、八分に減配して今日に及んでゐる。九年度決算四月末締切では、利益金八十萬圓を擧げたが、前年度に比し三萬二千圓の減益である。これは主として、足袋地下足袋の原料たる綿製品、護膜、甲馳原料が騰貴せる爲で製品市價も勿論騰貴してはゐるが、尙原料騰貴に及ばなかつたのである。然し社内保留率は尙四五%を示してゐるから、決算は餘裕を持つてゐる。元來當社製足袋は、原料及び形の吟味に於て他の追随を許さぬものがありために價格の割高も福助足袋なる暖簾によつて何等障害にならなかつたが、少くとも現行八分配當の維持が困難となるやうな事はなからう當社は現在我國足袋界の王座を占めてゐる。

山口竹治郎氏

大阪貯蓄銀行専務取締役

關西に於ける銀行業界の最高峰として、其頭角を輝かせるは大阪貯蓄銀行である。當行は普通銀行と異り、貯蓄を主とせるだけに手堅い營業振りを示してゐる。當行の創立は可なり古いものであつて、最初外山修造氏の提唱の下に、先代山口吉郎兵衛、平瀬龜之助、鴻池善右衛門等の諸氏に依つて商業の中心地たる大阪貯蓄なる名稱を以て設立せられたるものである。其創立せられたる際は多く少壯氣鋭の士によつて經營せられたるにより、經營方法の激進たることは、銀行界に於ても異彩をはなつてゐた。然し年と共に是れ等氣鋭の士も今は老境に入り、自然其思想も時勢に伴はずして、退嬰するの傾きがある。それは舊來の慣習を守り徒らに堅實の道のみを執着し、事業の擴張をあまり喜ばなかつた其後貯蓄銀行を經營するものが多くなり、自然競争激甚を極める様になつた。其際にも當行重役は依然として慣例を守つてゐたが、時勢は之を許さず、新進銀行家によりて一大改革をなすと共に擴張を斷行することを悟り、遂に大正九年に、山口竹治郎氏が聘せられるに至り、常務取締役の重職に選任せられた。氏は大阪の人にして明治十二年に生れである。氏は山口財

関の重鎮である山口吉郎兵衛氏と因戚關係にある人である。故に青年時代より山口銀行に入り、漸次果進して山口銀行神戸支店長として敏腕の聞え高かつたが、大正九年に大阪貯蓄銀行に招聘され、其後經營一切を托され専務取締役の要職に就き現在に至つてゐる。氏が當行に入つてからは大いに改善を行ひ、積立貯蓄、据置貯蓄の計畫を樹て、是れが宣傳に努め鋭意加入者の増加に努力した。其結果幾程もなくして其業績大いに上り、氏の當行に就任當時の預金は四千萬圓に過ぎなかつたが在職四ヶ年にして八千數百萬圓の預金を見るに至つた。之を以ても氏の手腕の如何にあるか窺知される。尤も一面貯蓄思想の勃興に因るもの多いと云ふも、國民思想の歸趨を察し、時勢に伴ひ努力奮闘し來りたる氏の力に俟つ事大なることは、否定出来ない事實である。氏は大阪に於ける財界の雄たる名門山口家の一族に生れ、世間一般の生活苦とは波交渉の内に育つたが、世に謂ふ處の旦那氣質は更らになく、至つて平民的である。そして頭腦は明晰にして業界の花形として重視せられてゐる。氏は明治十六年生れであるから、今働き盛りの年配である。何しろ事業を經營するには何と云つても氏の如く相當の年配にならなくては、世間の信望もなく且つ貫録もないから思ふ様に切り廻すことは出来ない。故に氏の如きは是れから益々財界に雄飛するにはもつて來い人物である。

北島安太郎氏

大阪製鉄株式會社々長

當社は大正九年五月創立し、資本金五十萬圓舊稱大阪シヤリングと稱す。昭和九年三倍に増資し現在總資本金一百五十萬圓である。當社の營業科目は鐵鋼材切斷、伸鐵ポンチング業である當社は兵庫縣尼崎築港埋立に各種工場を設く薄鋼製工場、中鋼製工場等ありて、其月産實に四・二〇〇噸を算せり、且つ最近中鋼製の増産計畫を立て大いに進展してゐる。當社々長北島安太郎氏は香川縣北島長太郎氏の二男にして、明治二十二年十二月一日を以て生る。同三十六年吉村玉吉商店に斯業を修得し、大正六年獨立開業す。氏は此外東洋製鋼商會監査役である。元來他會社の社長は多く、官立大學出なるに對し、氏は十五歳にして前記商店の實務にたづさはり、其蘊奥を極めたる奮闘努力の手腕家である氏は當社創立と共に推されて、現職に就任し大いに敏腕を揮ひ今日の躍進振りを發揮せしめてゐる。君は實に學の人にあらずして努力奮闘事に當りて屈せざる腕の人ともいへよう。社務を處理するに當りても縦横に其敏腕さを發揮させてゐる。氏は今働き盛りの年配である今後大いに飛躍せんことを祈る。最近當社の業績の向上は目ざましいものがある。即ち、七年下期薄鋼工場

新設以來積極的に設備を擴張し、現在では月産一千二百噸の能力を備へて居る。然も九年三月には中厚鋼工場能力月三千噸を新設したが、時機のよろしきを得た結果、九月上旬には利益六萬三千圓、利益率にして二割二分六厘の成績を得、配當も一割二分を行ふに至つた。尙去る十一月末で締切つた九下期の成績も極く順調に推移した筈である。と云ふのは前々期は殆んど試運轉の程度に過ぎなかつた尼崎工場の中厚鋼工場が、前期はフルに働いた結果、前期の歴延數量は去る九月の風水害で多少の影響を受けたにも拘らず、約一萬三千噸に達した模様で、販賣高は少くとも約一萬噸に達したと見られて居る。平均賣値を百四十圓と押へても適當り利益は約二十圓を期待されるから、中厚鋼からは總額二十萬圓の利益が擧る譯である。次に薄鋼生産高は約五千五百噸と言ふから適當り利益四十圓と見て總額二十二萬圓の利益が期待される譯である。安治川の薄鋼工場の方は前々期に較べて大した向上を見ず販賣高は約一萬三千噸と約一割餘の増加に過ぎないが、それでも利益金は約四萬圓程度になつた模様である。とすれば總生産利益は四十六萬圓となり、前々期の計上利益六萬三千圓に較べて約八倍と言ふ驚異的增加振りである。尙之に去る七月賣出した株のプレミア益十一萬圓（税金控除後）を加へれば實に前期の利益は五十七萬圓に達して居り、當社が今後益々發展向上をなすは明かなる事實である。

内田 勝 司 氏

東亞興業株式會社常務取締役

氏は千葉縣海上郡本鏡子町に生れたが、明治四十一年明治大學商科を卒業すると共に、多士儕々の三井物産會社に入り日本の資本主義が華々しい躍進を續けた時代に、廣く海外貿易事業に興味をもち、この方面の研究を怠らなかつたところ大正三年、農商務省は對支貿易の重要性に鑑み、南支那派遣官を新たに設け事情調査に當らしめんと、廣く野に人材を求めた時、白羽の矢を立てられたのが三井物産にゐた氏であつた。同社からは惜しまれつゝ、遂に同年支那に渡つて種々調査に怠りなく、大正四年十二月、美事大任を果して歸朝した。かくて官を辭して、多年の研究の成果を携へて、母校明治大學の教授となつた。ところが大戰景氣の最高潮にあつて、實業界殊に對支事業の方面が氏の如き才幹を長く地中に埋もれさせはしなかつた。かくて六年十二月、東亞興業會社の懇請もだし難く同社に入り、翌年明治大學を退いた爾來この國家的企業のために盡瘁し、着々その實績をあげ來つた。氏の努力たるや以後後進諸士の範とするに足るものが多い。當社は明治四十二年資本金二千萬圓を以て、對支投資を目的とする爲に創立された、東亞興業株式會社は取締役會長に門

野重九郎氏を据え、經營一切を牛耳る常務取締役に、對支企業の第一人者内田勝司氏を以てし、其の資本系統に日本興業銀行、三井合名會社、三菱合資會社等を有し當該會社中の白眉である。常に動搖し易い日支關係の中にあつて、對支投資事業を完全に遂行してゐるのは、商學博士の肩書をもつ、内田氏の手腕に依る所甚大である。對外投資の難點は借款償還及び借款利息の取立にあるが、當社の最近の成績をみるに、當社も大分備まされたものゝ如くみえるが、氏の方針として日支關係の好轉を待ち、尙支那に於ける諸事業の好轉を待てば、徐々に業務は改善するのであるから、此の際はあせらず待機の姿勢を保たうといふにあるから、例へば大正三年五月に貸付けた五十萬圓の南滿鐵道借款、大正九年支那交通部に貸付けた六百萬圓の有線電信借款、喜和紗廠關係貸付金四百五十萬圓等々の如き、償還期限の延長を承諾し其代りに種々の形式で借款利息を取立てる方法を確保してゐるから最近に取立額が著しい増加をみせ、殊に待てば海路の日和の比喩に洩れず、上海事變による混雜の整理に依つて、漸く環境の安定に伴つて上海に於ける不動産投資事業も常態に復した事は當社にとつて誠に喜ぶべきであると共に、特に南支那の事情に精通した氏が存分の手腕を揮ふに適して領域を展開するに至つたので、今後の氏の活躍にこそ期待すべきであり、今後當社業績の向上發展は疑はざる所である。

昭和十三年七月五日印刷
昭和十三年七月十日發行



定價金五圓

編輯人兼 山田 裕 康

印刷人 東京市牛込區山吹町五〇番地
國府田 信一 郎

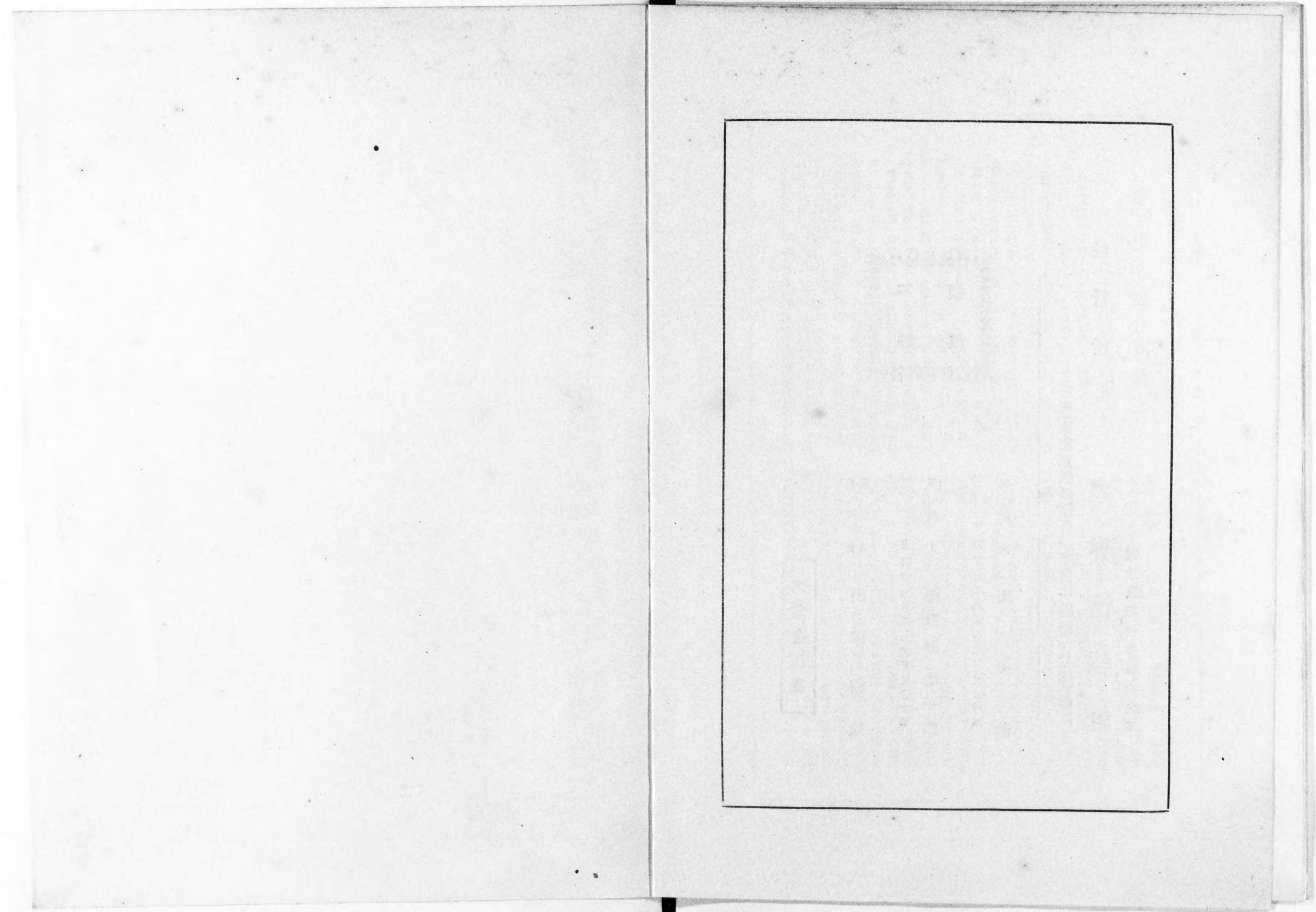
印刷所 東京市牛込區山吹町五〇番地
天 業 社

東京市京橋區槇町一丁目一番地(八重洲館)

發行所

業 界 情 報 社

電話京橋(四)四四六九番



終